

理論的に話す力を育成するための

オンライン・アカデミック英語スピーキング講座の構築

Developing a special online academic English course for logical speaking

服部 孝彦¹, ティモシー ライト², グレゴリー ジョンソン³, 高野 成彦⁴, ローレンス カーン¹
Takahiko Hattori¹, Timothy Wright², Gregory Johnson³, Narihiko Takano⁴, and Lawrence Karn¹

¹英語教育研究所, ²社会情報学部, ³比較文化学部, ⁴教職総合支援センター

キーワード: アカデミック英語, スピーキング力, スピーキングモデル

Key words: Academic English, Speaking ability, Speaking model

1. 研究目的

本研究の目的は、論理的に英語を話す力を育成するためのオンラインを使ったアカデミック英語講座を構築し、本学の英語教育に貢献することである。オンラインによる対話の研究は、Long (1996) によって提唱された相互作用仮説を理論的支柱としている。これは Krashen (1985) が述べているように、対話によって理解可能なインプットが言語習得を促進し、Swain (1995) の示した、対話によって必然的に与えられるアウトプットの機会を理解可能なアウトプットにしようとする努力が言語能力を発達させているといえるからである。そして、お互いの意思を伝え合うための明確化要求や、理解度確認といった意味交渉の結果、第二言語習得が促進されるというものである。

本研究では、スピーキングの理論的考察として、スピーキングモデルについての先行研究を整理した。そしてスピーキング理論に基づくオンライン・アカデミック英語講座を構築し、実践した。

2. 研究実施内容

Levelt (1989) は、人間がどのような認知プロセスを経て言語を産出しているかについてスピーチ・プロダクション・モデルを発表した。このモデルは、第二言語習得におけるアウトプットとしてのスピーキング力をどのように育成すべきかについて考えるにあたっての理論的基盤になると考えられる (櫻井, 2018)。

Levelt (1989) は、発話に至るまでのプロセスを次のように示した。まず「概念化装置」(conceptualizer) で、発話内容が生成される。そ

の後、「形式化装置」(formulator) で、文法コード化 (grammatical encoding) および音韻コード化 (phonological encoding) の操作が施され、発話内容が言語化される。文法コード化の段階では、メンタル・レキシコン内のレマ (lemma) に保存されている統語情報が活性化され、文法構造が形成される。また、音韻コード化の段階では、メンタルレキシコン内のレキシム (lexeme) に保存されている音韻情報が引き出され、リズム・イントネーションなどのプロソディが形成される。そして、「調音化装置」(articulator) で音声となり発話される。このプロセスが自動化されることによって、その言語の流暢な話し手となるのであるが、第二言語習得においては、その自動化を困難にする要因が存在すると考えられる (櫻井, 2018)。

日本人英語学習者の場合、統語処理段階でワーキングメモリに負荷がかかり、この統語処理の非自動性が英語の流暢性を獲得する上での大きな障壁となっていることが文処理研究から指摘されている (Nakanishi & Yokokawa, 2011)。文産出においても、いかに統語処理をワーキングメモリ資源をあまり用いず、効率よく行うことが出来るかが成否の鍵を握ると考えられる (中西, 2013)。

Jordan (1997) は、アカデミック・スピーキングを大学等での学習が中心の概念であるとしている。また、Using English for Academic Purpose For Students in Higher Education (2019) は、アカデミック・スピーキングとは、日常生活のスピーキングとは異なり、明白なものであり構造的であると述べている。アカデミック・スピーキングの使用場面に関して De Chazal (2014) は、講義、プレゼ

ンテーション、ゼミ、チューターとの面談、指導教員との面談、グループプロジェクト、議論の中での他の学生たちとのやり取りをあげている。このようにアカデミック・スピーキングは、高等教育機関などでの学習時の論理的なスピーキングのことを指すといえる（横山 2019）。

ボイクマン（2013）は山本（2004）や門倉（2006）の考え方を踏まえ、アカデミック・スピーキングは論理的思考力とコミュニケーション力の2種類に分類することができると述べている。本研究におけるアカデミック・スピーキング講座では、アカデミック・スピーキングという視点に立ち、コミュニケーション能力の構成要素の中でもディスコース能力の育成を中心に行った。

アカデミック・スピーキングの力を測定する国際的に認められているハイ・ステークスな試験にはIELTSとTOEFL iBTがある。アカデミック・スピーキング講座では、TOEFL iBTのSpeaking Sectionの中で、複合した技能ではなく、スピーキング力のみを測定するIndependent Speaking Testに出題されるimpromptu speech形式の問いを用いて、論理的に英語を話す練習を行った。

具体的な質問は、次のようなものである。

Many people enjoy living in smaller towns. Others like living in bigger cities. Which one do you prefer, living in a small town or a big city? Please give details and examples to explain your choice.

このような質問に対し、まず受講者全員に15秒以内で、一人でのブレインストーミングをしてもらおう。ブレインストーミング法は、Osborn（1953）によって開発された創造的アイデア創出のための問題解決法であり、膨大なアイデアを出すことにより、特定の問題に対する解決策を見つけるための集団活動である（Clark, 1958; Miller, Vehar, & Firestien, 2001）。本来は様々なアイデアを産出するために一人ではなく集団で話し合う方法であるが、この講座においては、一人でなるべく多くのアイデアを瞬時に考え、それらを、この例でいえば「都会暮らし」と「田舎暮らし」の利点と欠点に分類する作業を15秒の制限時間内で行う。15秒経過後に話を始めるわけであるが、その時には、自分は都会と田舎のどちらを選ぶかが決まっておらず、それに決めた理由を重要な順に述べることになる。受講生全員のimpromptu speechが終了

した後は、受講生たちによるディスカッションとなるが、その際は、(1)なるべく多くのアイデアを出す、(2)固定観念にとらわれない、(3)ほかのメンバーの出したアイデアを批判しない、(4)アイデアを練り上げより良いものにする、というブレインストーミング法の4つの基本的ルールを守って話し合うことになる。

講座終了後、受講した感想を自由記述形式で答えてもらった。以下は、受講した学生の代表的な感想である。

・学生が発言した後に、直接服部先生からフィードバックを頂けたことで自分の弱点や改善点を認識することができました。また他の受講生の発言内容や、他の受講生への服部先生のフィードバックからも学べる点が多くあり、とても貴重な、学ぶことの多い機会となりました。

・説明が全て英語で行われるため、はじめは聞き取れなかった部分も多くありましたが、徐々に耳が慣れ、リアクションを取れるようになりました。授業開始当初は、恥ずかしさや自信の無さからあまり話せなかったのですが、服部先生や他の受講生たちとの質疑応答により、自分でも変化に気づくことができるほど英語が抵抗なく話せるようになったことに驚きました。Zoomによるオンラインの講座で、しかも短い時間でこんなにもスピーキング力が向上するのだと嬉しくなりましたし、もっと自分の言いたいことをきちんと話せるようになりたいと思うようにもなり、英語を勉強するモチベーションが高まりました。

・ロジカルに英語を話すコツや、他の受講生が使っているアカデミックな英単語など、日頃の大人数の授業では気づかない点に気づけたという点が勉強になりました。

・服部先生の論理的に英語を話すための指導が、スピーキングだけではなく、アカデミック・ライティングにも役に立つと思いました。

・服部先生が返答一つひとつにアカデミック英語を身につけるために必要な適切なアドバイスをくださるので、話す内容の論理的構成のみならず、アカデミックな単語や文の構成についても深く知ることができました。

・他の人の意見を聞いたり、自分の意見を述べたりすることで、論理的な文章の組み立て方の難しさと楽しさを学ぶことができました。テーマに沿って自分の意見を述べるには、語彙力だけでなく即興力も必要だということが分かり、その能力を

伸ばすにはこの講座で行った練習を重ねていくしかないと思いました。

・論理的な話し方というのは、意識しなければ難しいことであると改めて痛感しましたが、とても勉強になりました。特に私は日常的に、冗長な話し方をしてしまうことがよくあるためです。ですが今回のアカデミック・スピーキング講座では、講座の初めに服部先生に教えていただいたロジカル・スピーキングの基本的考え方を最初から最後まで意識して話すことが出来ました。今回教えていただいた論理的な話し方というのは、英語のみならず日本語においても大切なことですし、この先、様々な場面で活かしていけるとと思います。今回この講座に参加することが出来て本当に良かったです。

3. まとめと今後の課題

アカデミック英語のスピーキング力を伸ばしたいと希望している学習者は多い。しかし、英語を使って論理的に話す力をつけるためには、どのようなことができるようになればよいのか具体的に把握している学習者は少ない。今後は、オンライン・アカデミック英語講座を継続的に実施しながら、学習者の現時点での英語力や英語学習の目的に合わせて、英語で何ができるようになればアカデミック英語のスピーキング力がつくのかといった明確な到達目標を、学習者がイメージできるようにしていく必要がある。

4. この助成による発表論文等

①雑誌論文

[1] 服部 孝彦, 「英語スピーキング力育成に関する考察: オンライン・アカデミック英語スピーキング講座の実践研究」, 日本人類言語学会学術誌『人と言語と文化』, 第13号, 2022, pp.3-25. 【査読あり】

②学会発表

[1] Takahiko Hattori, "Improving Students' Oral Production Skill through Online Academic English Class", 日本言語文化学会第29回研究大会, 2022年9月10日, 大妻女子大学

[2] 服部孝彦, 「論理的思考力を育む英語アカデミック・スピーキングの指導」, 日本人類言語学会第22回学術大会, 2022年11月20日, 北九州市立文学館

[3] 服部孝彦, 「英語オンライン・スピーキングを

通したディスコース能力の育成」, グローバル人材育成教育学会中部・関西合同支部大会(第6回 中部支部大会/第7回 関西支部大会), 2023年2月19日, 金沢工業大学

③図書

[1] 服部孝彦, 「英語スピーキング力の育成」『グローバル化時代の英語教育論』, (pp. 81-94), 2023年1月13日, 共同文化社

参考文献

ボイクマン総子 (2013) 「初級前期からのアカデミック・ジャパニーズ教育: 初級前期の口頭発表の実践」『AJ ジャーナル』5, 11-19.

Clark, C. H. (1958) *Brainstorming: The dynamic new way to create successful ideas*. Garden City, NY: Doubleday.

De Chazal, E. (2014) *English for academic Purposes: Oxford handbooks for language teachers*. (pp. 243-245). Oxford, UK: Oxford University Press.

Jordan, R. R. (1997) *English for academic purposes: A guide and resource book for teachers*. Cambridge UK: Cambridge University Press.

門倉正美 (2006) 「〈学びとコミュニケーション〉の日本語力アカデミック・ジャパニーズから発信」『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』東京: ひつじ書房, 3-20.

Krashen, S. (1985) *The Input hypothesis: Issues and implications*. New York: Longman.

Levelt, W. J. M. (1989) *Speaking: From intention to articulation*. Cambridge, MA: The MIT Press.

Long, M. (1996) The role of the linguistic environment in second language acquisition. In W.C. Ritchie & T. K. Bhatia (Eds.), *Handbook of language acquisition*, 413-468. San Diego, CA: Academic Press.

Miller, B., Vehar, J., & Firestien, R. (2001) *Creativity unbound: An introduction to creative process*. Williamsville, NY: Innovation Resources, Inc.

中西弘 (2013) 「英語運用能力を伸ばすシャドーイング」. 『東北学院大学論集 英語英文学』97, 117-123.

Nakanishi, H. & Yokokawa, H. (2011). Determinant processing factors of recall performance in reading span tests : An empirical study of Japanese EFL learners, *JACET Journal*, 53, 93-108.

Osborn, A. F. (1953) *Applied Imagination: Principles and Procedures of Creative Thinking*. New York: Charles Scribner's Sons.

櫻井千佳子 (2018) 「小学校教員養成課程における英語スピーキング力の育成に関する一考察：教室英語の誤用を手がかりに」『武蔵野教育學論集』5, 武蔵野大学, 89-101.

Swain, M. (1995) Three functions of output in second language learning. In G. Cook & B. Seidlhofer (Eds.), *Principle and practice in applied linguistics: Studies in honor of H. G. Widdowson*. (pp.125-144). Oxford, UK: Oxford University Press.

Using English for Academic Purpose for Students in Higher Education. (2019) *Speaking in Academic Contexts*,

<http://www.uefap.net/speaking/features/speaking-features-introduction>, accessed 21 October 2022.

山本富美子 (2004) 「アカデミック・ジャパニーズに求められる能力とは：論理的・分析的・批判的思考法と語彙知識をめぐって」. 『移転記念シンポジウム：アカデミック・ジャパニーズを考える 報告書』. 1-6.

横山千聖 (2019) 「日本人学習者の Academic Speaking の評価基準の構築と妥当性の検証」『広島大学大学院教育学研究科紀要第二部』68, 広島大学, 205-214.

付記

本研究は、大妻女子大学共同研究プロジェクト (令和4年度 K2212) の助成を受けたものです。